

短作文の学習指導

— 学習記録を活用して —

西 紀 子

一、はじめに

国語科における作文力育成には、作文単元としてそれぞれの目的に応じて長作文を書かせながら指導する場合と、練習単元として短作文の形で指導し、作文基礎力を演練させる場合とがある。私は特に、文章制作のためには、この後者の方法による作文技能の基礎訓練を丹念に指導する必要性を痛感している。短作文指導は、普通取り立て学習として指導することが多いが、わざわざ取り立てなくとも、学習記録（ノート）という生きた学習の場で短作文指導が行えるのではないだろうか。毎日の学習の記録を足場として、書く態度と習慣をしっかりとしたりしたものにし、実際的な文章を書くことに習熟させることと同時に、作文の基礎力を指導しようとするものである。

学習記録には、毎時間欠かすことなく、何かを記録している。単に教師の板書の引き写しに終わっているだけならば、その記述は短作文とは言えないかもしれない。しかし、要旨をまとめる学習にしろ、一次感想を書く活動にしろ、また授業反省を記述することにしる、すべて短作文の形で書かれたものであるから、そうした生きた作文を活用し、作文力を育成していく場として位置づけ、根気よく指導していけば、作文力向上に効果があるのではないだろうかと思

う。

なお、短作文とは、一語作文・一文作文から始まって、二〇〇字以内で書く作文と規定しておきたい。

二、学習記録の形態

私は昨年あたりから、生徒の学習記録を市販の普通のノートから、郵便に書かせたものを綴じ込ませる方式にかえている。こういう学習記録については、古くから大村はま先生が実践されている方法であるが、先生のご実践の「手引き」を参考にさせていただいて、本年度から全面的に改善に踏み切ったところである。学年頭初、次のようなプリントを配布して、新しい学習記録について説明した。

学習記録（ノート）について

1 学習の記録は、今までのノートを使わないで、けい紙を使って、学習した一切のことを記録する。内容としては、

。 今までのノートに記録していたこと。

。 作者、出典などについても、事典類を丸写しせず、自分のものにして短い文章にする。

- ・ 学習課題や読み取った内容・要旨・主題などをまとめる際
に、できるだけ文章の形で表現する。
- ・ 話し合い学習の時も、話し合いの内容を二〇〇字程度にま
とめる。
- ・ 学校での学習以外に、自主的に学習をし、何でも記録する。
毎時間の授業反省を書く。
- 2 プリント類も一切いっしょにとじる。
- 3 原稿用紙に書いた作文もいっしょにとじる。
- 4 テスト類も一切とじる。
- 5 平素はファイルにとじ込んでいき、一単元終わるごとに一
冊の学習記録に編集する。
- 6 けい紙（売店で販売）の使い方は自由。ただし縦書き。け
ちらないで――。

新しい試みには、生徒は生き生きするものである。出発は順調に
いった。しかし、話し合いの記録や、毎時間の授業反省の記録に
は、生徒も何をどのように書いたらいいのか困ったようである。と
もなく一単元終了し、一冊の学習記録として編集させるにあたっ
て、大村はま先生のご実践を活用させていただいて、次のような手
引きを与えた。

学習記録作成の手引き

一、順序

・ 表紙（画用紙）

・ とびら

・ 目次

・ プリントやけい紙に書いてある記録、作文など

・ あとがき

・ 裏表紙

二、表紙、とびらに書くことがら

・ 題（単元名でもよいし、自由。）

心と言葉

・ 副題 ― 国語学習記録 1―

・ 学年・組・氏名

三、目次

・ プリント類、学習した記録一切、作文すべてを自分で最
もいいと思う順序に並べて編集する。

・ 白紙へ書き、見開きにする。

・ 全体へページを通してつけ、記入する。

・ 全体へページを通してつけ、記入する。

四、あとがき

・ この一冊ができるまでの学習のあとを考えて。（書き方
の詳細は後述）

・ 四〇〇字程度にまとめる。（原稿用紙）

五、評価表

年 組 () 氏名		評点	自己 評価	教師 評価	教師評
目	標				
1	提出日に提出	50			
2	すべきことがしてあ	5			
3	内容(正しさ)	5			
4	内容(豊かな学習一)	5			
5	読書感想文	5			
6	目次	5			
7	あとがき	5			
8	表紙(書くべきことと 書かれています)	5			
9	表記(漢かなづかい)	5			
10	文字の書き方	5			
11	きちんととじてある	5			
計		100			

この学習記録についての生徒の反応は、非常に良好であった。学習の記録を集めて編集することに、今までにない充実感を味わっていた。あとがきに書かれた評価を整理してみると、次のような点があげられる。

- 1 プリント類と学習の記録がうまく整理できる。
- 2 編集に工夫がこらせ、創造的に編集することができる。
- 3 編集しながら、学習のあとをもう一度たどることができ、一元でこれだけの学習ができた充実感ももてる。
- 4 学習の足りなかつた点を反省することができる。

三、学習記録における短作文指導の場

国語学習のうち、作文単元は別として理解領域単元の学習の中で、学習記録を活用した短作文演習の場は、次の二つに大別される。一つは「教材の学習での書く活動」、すなわち、理解と表現の関連指導としての書く活動と、今一つは、学習記録としての機能をより充実したものとするための「学習記録としての書く活動」である。それぞれの活動についてさまざま場が考えられるが、次のように分析整理してまとめてみたい。

1 教材の学習での書く活動

(1) 文章を読み深めるための書く活動

例えば、要旨・主題のまとめ、一次感想、読み取った内容のまとめなど

(2) 文章から触発をうけた問題について自分の考えを述べる活動

(3) 作品を参考にして文章練習をする活動

2 学習記録としての書く活動

(1) 毎時間の授業反省の記録

(2) 話し合いの記録

(3) あとがきの記録

四、実践例と考察

1 文章を読み深めるための書く活動

(1) 一次感想

作品を読んで、いきなり一読後の感想を書かせようとしてもとま

どう生徒が多い。手引きを与えて、観点なり、手順なり、書き出し
なりを示せば書けるようになる。三年生における「山椒魚」(井伏
鱒二作)の学習では、次のような手引きを与えて指導した。

〔一次感想の手引き〕

「山椒魚」を読んで、次の観点について感想を書いてみよう。この観点を全部取り上げるのではなく、書きたいものを一つ二つ取り上げて、二〇〇字以内で書こう。

- ①この作品の第一印象。
- ②他の小説と特に変わっていると思われる点。
- ③自分の日常生活の中で、この小説の場面と共通することはな
いか。特に身につまされる思いがした箇所は。
- ④疑問点。
- ⑤深く追求してみたいと思う問題。
- ⑥その他何でも。

△作品例▽

この作品は、岩屋から出られなくなつた山椒魚を大変おもしろく、またあわれに描いていて、とてもおもしろい。特に、さんざん苦しんだ山椒魚がかえるを岩屋から出られないようにして自分の仲間にまき込んだところは、ほくだって、あんな場面では同じようにしただろうと思つて興味深かった。それにしても作者は山椒魚を通して何が言いたいのだろうか。山椒魚は何

(指)ところ

を意味しているのだろうか。そしてかえるも。

(S男)

△考察▽

この作品は比較的優秀な生徒のものであるが、中学生の一読後の感想としては、かなり深く読み取り、表現のしかたも一応整っている。このように山椒魚は何かを象徴しているのではないかと、最初から読み取っていた生徒は少なく、単に山椒魚のしぐさをおもしろがったり、あわれな山椒魚に同情している生徒が多かった。一次感想は、そうした生徒の反応を見て、教師が指導計画を立てるためのものでもある。しかし、生徒にとつても、一読して漠然としている感想を整理し、問題点を明らかにして読みを深めていく手だてとして、一次感想を書かせる指導は非常に重要である。その際、感想を書く観点などの手引きを与えながら繰り返し書かせることによつて、一次感想の書き方に習熟し、読み取りが深まらっていく。後には手引きなしでも目のつけ所がわかり、抵抗なく一次感想が書けるようになっていく。ただ二〇〇字以内にと限定すると、のびのびと感想が書けない難点があるが、自己の思いを簡潔に表現する訓練として、むしろ効果的ではないかと思つた。

(2) 内容の読み取り

「山椒魚」の学習の中で、「山椒魚はいったい何を意味しているの
であろうか。」という疑問点について、班で話し合せて上段、
個々の意見を書かせた。その際、次のような手引きを与えた。

短作文の手引き

。題「山椒魚の意味するもの」

。書き出し

この小説では、山椒魚は（ ）を意味していると思う。それは……。

。()の中に適当なことを入れて、この続きを二〇〇字程度で書こう。

△作品例▽

山椒魚の意味するもの

この小説で山椒魚は（自分のことはさておき、他人にばかり文句を言う現代人）を意味していると思う。それは、自分だつて岩屋の中（わくの中に閉ざされた人間社会）に閉じ込められて身動きできないくせに、めだかの群れに対して、「なんという不自由千万なやつらであろう。」と批判したり、えびに対して「屈託したり物思いにふけつたりするやつはばかだよ。」とか言つて、自分は物思いにふけつている。そういうことから、他人に文句を言う現代人だと考えた。

(T子)

△考察▽

この作品は中程度の生徒のものであるが、一つのパターンを示しておけば、それに当てはめて、結論の根拠を具体例を挙げて説明し、一応整った文章を書くことができる。三年生であれば、こういう種

類のものであれば、次回からは「手引き」なしでも書けるようになる。特にこの場合は、意見文の意見と根拠を述べるパターンの練習として位置づけたい。

2 文章から触発をうけた問題について自分の考えを述べる活動

「山椒魚」の学習で、人間の生き方の問題に発展させて考えさせ

た。

短作文の手引き

次のいずれかの問題を選択して、人間の生き方の問題として考えて書いてみよう。

① 「山椒魚」や「かえる」に自分をおきかえて、自分を見つめて書く。

② 「めだかの群れ」に自分をおきかえて書く。また、客観的な立場で批判的に書く。

△作品例▽

ぼくは、めだかの列の一番後ろにくっついてるめだかだ。前のやつがつまずけば、ぼくもその通りにつまずかなければならない。濁った所を通らないで、向こうの明るく澄んだ所に行きたいのに、先頭の指導者がにらみをきかせていて自由行動は許されない。もっとも、人間は強い者に従順であることは安易な生き方かもしれない。それでは満足できない。強い者に対抗できるだけのしっかりした主体性を持たなければならぬ。

(N男)

△考察▽

「山椒魚」について、一次感想や作品の象徴するものなどについて十分考えさせておくと、人間の生き方の問題として発展的に考えることができるようになる。この作品もかなり優秀な生徒のものであるが、どの生徒も、山椒魚の立場になったり、かえるの立場になったりして、いろいろな発想で興味深く書いていたようである。この練習では、作品の世界を人間の生き方の問題として、自分たちの生活に結びつけて考えさせるためのものであり、読書感想文を深まったものにするためにも、ぜひ書かせたい課題である。この場合も二〇〇字以内の短作文と限定すると内容に十分な掘り下げができないが、取り上げる内容を焦点化し、簡潔な表現にするための語い選択など、文章を練りきたえるためには、非常に効果的である。例文の生徒も、二〇〇字に収めるため、何度も推敲をし、語い選択には、教師の助言を求めている。

3 作品を参考にして文章練習をする活動

(1) 比喩表現の練習

三年生の教材「季節」（井上靖作）の中にすばらしい比喩表現が沢山使われている。それらを抜き出して鑑賞しながら、表現の学習へと発展させた。

短作文の手引き

- ① 直喩の表現を連文節の形で、三つ書きなさい。
- ② 直喩を入れて、一文作文にしなさい。
- ③ 隠喩の表現を連文節の形で一つ書きなさい。それを一文作

文にしてみましょう。

- ④ 擬人法を使って、一文作文を書いてみましょう。
- ⑤ 幼い頃の季節にまつわる思い出を書いてみましょう。比喩表現を必ず一箇所入れて二〇〇字以内で書きましょう。

△作品例▽

ぼくが、まだ幼稚園の年長組だったころ、父とぼくとで、祖母と祖父のいる尾道へ帰ることになった。それは母がお産で入院しているからだ。一晩父ととまって次の日父は会社があるので帰えらなければならなかった。それで、ぼくだけ祖母と祖父の家において帰える時、ぼくは、父を見おくらないで倉のうらへ駆けだしていった。あの時は、もう、人の声も聞こえず、風の音も何もかもが遠ざかっていってしまおうようにのでくさりをもってきて遠ざからないようにしはっておきたい気持ちで一配^{トウ}だった。それで今のさびしい自分をなぐさめてくれる物が秋のまっかな夕暮れであった。

(T男)

△考察▽

この生徒は、学級でも表現力の一番劣った部類に属する生徒であるが、幼い頃両親と離れて一人親戚に残された時の寂しさを、比喩を入れながらせいっぱいに表現している。本人の了解を得て、この作品を使って、全体批評という形で推敲の練習をさせた。その際の観点を次のように指示した。

推敲の手引き

- ① 文意の通じない所はないか。
- ② 漢字・表記の間違いはないか。
- ③ 無駄な表現はないか——二〇〇字以内にするにはどう整理したらいいか。
- ④ 比喩表現はいいか。
- ⑤ 三段落の文章にしてみよう。

特に、無駄な表現を簡潔に整理する点と、短作文であっても、三段落の構成にする指導に重点をおいた。グループや全体で討議し、次のような作品に推敲することができた。

秋の夕暮れには寂しい思い出がある。

幼稚園の年長組の頃、母のお産のため、父と尾道の祖母の家に行った。父は勤めがあるので、ほくを残して帰ることになった。ほくは父を見送らず倉の裏へ駆けて行った。あの時はもう人の声も、風の音も、何もかもが遠ざかって行ってしまつて、鎖で、縛っておきたいような気持ちでいっぱいだった。折から、西の空は真赤な夕焼けで、落ち葉がひらひら舞っていた。

4 学習記録としての書く活動

(1) 授業反省の記録

毎時間の授業反省を学習記録に記述することは、学習の定着化を図り、問題点発見に非常に役立つと同時に、文章の基礎練習をする

場ともなる。一年生では、その日の学習のポイントと学習態度についての簡単な反省程度から始め、三年生では、授業内容に対する自分の取り組みの様子とか、解明できた点、疑問として残った点、この時間に国語力として何が身についたかなど、短作文の形で記録させようとするものである。初めは、記録する時間の位置づけもないので、三年生であってもなかなか思うように記録できなかったが、逐次、いい記録を紹介したりしながら、習慣化していった。

△作品例▽

今日の主題学習（「生まれ出づる悩み」有島武郎作）では、あらかじめ自分なりに主題はつかんでいたつもりであったが、手引きに従って考え、班で話し合っていくと、AさんやB君の考えと少しく違っていることがわかった。特に主題を暗示している所（私は10ページ終わりの方）が、「尊い一つの魂が母胎を破り出ようとして苦しんでいる」にあることがわかり、「生まれ出づる悩み」の意味もよくわかってきた。（M子）

△考察▽

この記述は、単なる授業態度についての反省ではなく、この時間に自分が得たものについて、具体例も挙げ、うまくまとめていると思う。二〇〇字以内で書くように指示しているので、主語の省略があったり、やや書き足りない感もあるが、毎時間のことだから、この程度のものでいいのではないかと思う。こうした授業反省の記録を毎日積み重ねることによって、思考力・認識力も養成することができると、さまざまな作文形態の練習、基礎的な表現技能の訓練

の場ともすることが出来る。ただ毎日のことなので、書く内容やパターンがマンネリ化するので、書く観点を指示したり、いい記録を紹介して刺激を与えるなど、工夫を要する。

(2) 話し合いの記録

国語授業では、全体やグループで話し合いをさせることが多い。だが、それは話しっぱなしになることが多く、話し合いを記録することはなかなか容易ではない。しゃべることに夢中で、メモどころではない。しかし、ひとしきり話し合いが終わったところで、一人一人の発言の要点を簡単にメモし、話し合い全体のなりゆきを記述することは大切なことである。そこで、「山椒魚」の学習で、次のような話し合いの手引きを与え、練習させてみた。

学習記録の手引き——話し合い——

学習記録には、学級全体や、班での話し合いも記録に残すようにしましょう。話し合ったことは、すぐに消えてしまします。しかし、記録することによって、自分の意見はもちろん、友達の意見もはっきりきて、考えた内容が深まっていくものです。話し合いを記録することはなかなか難しいことです。社会に出てても必要なことです。要点だけを簡単にメモすればいいのです。こういう記録を丹念にやっていると、作文力がうんと伸びるものです。

「山椒魚の象徴するもの」

() さんの意見は……

() 君の意見は……

…
全体の話し合いの結果——次の例を参考にして書こう。

例

A君・C君・Fさんは、最初から同じ意見だったが、Dさんの意見はつじつまが合わないということで、途中から三人に妥協してきた。しかし、B君とEさんは、どうしても譲らない。B君は、この大正十二年頃(「山椒魚」が書かれた時代)のことを考えると、どうしても……だと言い、Eさんは、井伏鱒二の「屋根の上のサワン」を読むと同じようなことを言っているからと言う。だから、私たちの班は三つの意見が対立している。

△作品例▽

二年生での「信号」(ガルシン作)の学習の中で、主人公セミヨンとワシーリーの生き方についてグループ毎に、討議させた。その対照的な生き方について、生徒は興味深く活発な意見をたたかわせた。次の例はその際の記録である。

A君・Bさん・Cさんは、最初からセミヨンを支持していたが、ほくとE君・Fさんは、不合理があっても黙ってしんぼうするセミヨンの生き方はダメで、積極的によくしているとうと行動に移すワシーリーの生き方に賛成だと主張した。^(指)しかし^(指)ワシーリーは^(指)ワシーリーは、いくら考え方はよくても、人の命を考

えない列車転覆を企てたのだから、どうしても人間として許せないということになって、セミヨーンの支持者が五名になった。(指)しかし、ほくだけは、最後にワシリーイが改心して、血染めの旗を振ったからこそ、列車を止めることができたのだから、ワシリーイにも良心があり、許してやるべきだと一人が(指)もんばった。(指)しかし、Bさんがワシリーイの心を変えさせたのは、セミヨーンの自己犠牲の行動だと言ったので、ほくもどうとうセミヨーン派にかぶとを脱いだ。ほくらの班は、みんなセミヨーン支持になった。(K男)

△考察▽

この記録は、作文力のある生徒のものであるから、二十分間の討議の内容を比較的簡潔にわかり易く記録している。同じ内容でも、だからだと非常に長くしか書けない者、また、「初め三対三だったが、最後はみんなセミヨーンになった。」とか、「今日の討議は意見が活発に出て、おもしろかった。」とだけしか書けていない生徒もあり、討議の内容をまとめて記録させることは相当の指導が必要である。K男の作品例をプリントして、記録のしかたについて、指導を行った。討議や話し合いの記録は、話し合いの内容・推移を書かせることに意義がある。一年生から、段階を追って、繰り返し教師のたゆまぬ指導が必要である。こういう積み重ねをしていくうちに、生徒の書く力は自ずとついていくのではないだろうか。

なお、こうした話し合いの記録は、二〇〇字以内と限定すること

は無理のようである。少なくとも四〇〇字は必要である。

(3) あとがきの記録

学習記録のあとがきは、総合的な作文力を育成するには格好な場であろう。まず、あとがきには、何をどんなに書けばいいのかを、大村はま先生のご指導になった「手引き」を示して、書かせた。

学習記録の手引き ーあとがきー

1 こんなことを書く(内容)

- (1) いま、まっ先に思い出されること。
いちばん、心に残っていること。
強く感じたこと。

- (2) とりわけ、勉強になったこと。

- (3) もっと、つっこんで、学習したこと。

- (4) 疑問が残っていること。
このことはどうなのか、と思うこと。

- (5) この学習にはいる前の自分、学習が終わっての自分—ど
こが変わったことはないか。
心の向け方、態度で。
していること、気をつけていることで。
考え方で。

- (6) これからの自分を予想して。
書き出しの例

2 書き出しの例

- (A) ひと言の感想から

- 今、この学習記録「」をまとめ終えて……
- 今この学習記録をもう一度見直しながら……
- (B) すぐ、内容の(1)から
 - この「」の学習で、いちばん心に残っていることは……
 - ……
- (C) すぐ、内容の(2)から
 - この学習で、とりわけ勉強になったことは……

△作品例▽

今、この学習記録「言葉と思考」をまとめ終えて、ぼくにしている記録ができた満足している。

この単元でとりわけ勉強になったことは、日本語の特色が整理できたことだ。今までこんなことはほんやり考えていただけで意識していなかったが、改めて日本語の難しさを自覚した。特にしゃべる時、結論を先に言ってから根拠を言った方がいいという原因が「文末決定性」にあることもわかった。

もう学習記録も八冊目だから、編集のしかたはうまくなったと思う。特に目次やとじ方には自信がある。ただ残念なことは、自主的な学習が少ないということだ。文学の単元だったら進んで何をしたらいいかわかるので厚い学習記録ができ上がったが、説明文の場合はよくわからない。次からはもっと自主的に学習しようと思う。

(Y男)

△考察▽

学習記録も回を重ねることにりっぱなものが出来上り、あとがきの文章もしかりしてきた。ややパターン化してきたきらいもあるが、最初に示した手引きも身につけて、全員の生徒があとがきらしいものが書けるようになった。作品例の生徒も、当初は文章の書けない生徒であったが、一応整ったあとがきが書けるようになった。学習記録のあとがきを繰り返し書かせることによって、文章力も伸びてきたし、国語学習の定着化を図ることができるのが、大きな収穫であると思う。

五、おわりに―反省と今後の課題―

本年度担当した第二学年と第三学年において、学習記録の指導を通して意図的に作文力を育成しようと試みた。本年度はまだ、事前事後の実態調査も実施しておらず、はっきりしたデータは出ていない。しかし、少なくとも、作文を書く際にいやがったり、何を書けばいいのか困る生徒はいなくなり、書こうという意欲と書けるという自信を多少なりともひき出してきたのではないだろうかと思う。もちろん、作文単元での指導と相俟つてのことではあるが、短作文指導を特に取り立てなくとも、日常の学習を通じて書くことを定着させ、意図的に指導を加えることによって、作文力を養成していくことができる。

野地潤家先生は、「作文教育の探究」の中で、「なかでも、国語科学学習記録の丹念な集積と継続は、書く生活を多角的に展開し、その習慣・態度を養っていくのに、もっとも大きい寄与をする。学習記録(ノート)指導は、書くことの練習の基本であって、これを放

任しては、書くことの生活の緊張した當為は見失われてしまう。国語科学習の予習・復習・練習を通じて、学習記録（ノート）には、中学生に求められる各形態の書くことの経験が包括されてしまうのであろう。」と述べておられる。学習記録こそ、表現力育成の源泉と言ってもいいのではないかと思う。

今回の実践報告は、三学年の主として文学単元にかたよった。本年度は、学習記録の指導において、単に作文指導を意識して実践した段階であったが、次年度からは、学習記録における作文力の系統的な指導体系、すなわち学年毎のカリキュラム化を試みてみたいと思う。それには、まず学習記録の記述内容の学年段階における位置づけをすることから始めなければなるまい。その上で、国語科各領域の学習活動の中で、基礎的な表現技能をどこでどのようにおさえて指導するか、さらに、観察力・描写力・思考力をどこでどのように働かせて、さまざまな文章形態の基礎学習を習熟させるかなどの位置づけをしていきたいと思っている。（昭和55年2月29日稿）

参考文献

野地潤家「作文教育の探究」（昭和47年7月20日初版発行）

文化評論出版

（広島市立楠那中学校教諭）